



寄稿

「文房四宝」——其の「筆」編

せき いずる  
関出

中国では古来、詩歌・書画など、文芸をたしなむ文人墨客の書齋を文房と呼び、用いる道具類を文房具とされました。中でも、愛玩する「筆・硯・墨・紙」は主要な存在として、文房四宝との呼称が根付きました。中国、朝鮮から日本へ其々の職人や製法が渡来し、文書、写経などに需要の多くがあった時代からの変遷を経て、今なお受け継がれております。

一方、デジタル化が急速に発展した現代社会の日常において、墨を磨り、筆を使って紙に手書きする機会は一般的には少なくなりました。毛筆には獣毛が多く、剛毫筆、柔毫筆、幾つかの種類が組み合わされる兼毫筆があります。それぞれが有する腰の強さや、墨や絵具の含み具合などによって、表されるおもむきには、おのずと

差違がでます。各人の思考や心象を反映するとともに、手に合って馴染み、自在に使いこなされる道具となっております。獣毛には、羊毛(山羊)、兔(紫毫)、馬、イタチ(鼬\狼毫)、タヌキ(狸)、鹿(夏毛)、テ山馬(鹿の一種)、リス(栗鼠)、豚、猫(玉毛)、豚、猪、牛などが用いられ、部位によっても毛質や長さなどは様々で、優れて適した毛が選別されます。

日本画用筆には、線描、彩色、隈取、付立、削用、則妙などを用途とする筆、形態にも丸筆、平筆、

連筆、刷毛などがあり、穂の長さ、弾力、墨含、剛さなどについては種類が豊富です。

鉛筆、万年筆、ボールペン、パソコンやプリンター、スマホの交信機能などが、社会一般に行き渡る中、芸術表現の領域へと縮小した感のある毛筆の需要状況にともない、筆職人(筆司・筆工)は激減し、最適な原料調達にも困難を極め、生産地も限られる昨今の筆づくりの環境ですが、なお、丹念な手作業によって一本一本、仕上げられております。



書筆



画筆



天平筆(模作)  
東京藝術大学  
大学美術館収蔵標本

## 筆者プロフィール

関 出 SEKI Izuru

駿河半紙技術研究会会員

(日本画家)



### 【略歴】

1972年	東京藝術大学美術学部卒業 (卒業制作買上 大学収蔵)
1974年	東京藝術大学大学院修了 (サロン・ド・プランタン賞)
2001年	東京藝術大学教授 現在名誉教授
2009年	東京藝術大学美術館 館長兼任 (～2015)
2014年～	(公財) 美術文化振興協会 常務理事
2018年～	(公財) 日本芸術協会 理事

筆穂には獸毛のほかにも、竹、藁(みご稗芯)・木・草などの植物繊維、鳥の羽、ナイロンなどによる独特な筆もあり、多種多様です。筆に関する語句には「筆致、筆触、筆意、筆法・運筆・筆遣い・筆さばき、筆圧、筆力、筆勢・」等々、文字通り造形表現上の手腕に結びついております。

さて、続けて土筆(つくし)のことまで記しますと、



画室の筆 (関)

「筆が滑る」はめになりませんので、拙筆をおくことにいたしましたしょう。

駿河半紙技術研究会主催

令和4年度

## 総会・記念講演会・懇親会のお知らせ

会期 令和4年11月19日(土) 11:00～13:00

会場 富士宮市矢立町737 和風料理「花月」 TEL 0544-23-4141

<http://shizuoka.j47.jp/kagetsu/>

会費 1名 2,000円(税込み)

内容 11:00～11:10 総会

11:10～12:00 記念講演会

講師 渡井一信氏(富士宮市郷土資料館館長・当会員)

仮演題 「45年間 富士宮市文化行政に関わって」

12:00～13:00 懇親会 美味しい和定食を。

申込方法 郵便振替をご利用頂き、前金制でお願い致します。

00830-7-137 内藤恒雄

申込締切日 令和4年10月20日(木)



2015年10月 NHK 総合『プラタモリ』～富士山編～出演時の渡井氏(左)

内藤恒雄手すき和紙記念館 内藤恒雄

419-0301 静岡県富士宮市上柚野907-1 TEL&FAX 0544-66-0738

★★ 令和4年度の年会費1,000円のご入金も忘れずにお問い合わせ致します ★★